

あか はなあか み 赤き花赤しと見つつ

■ 楽曲データ

歌詞：岡本かの子 作詞

楽曲：山田耕筰 作曲

発表：佛教讃歌刊行普及会

初演：—

初出：『佛教讃歌』 佛教讃歌刊行普及会 1952年

管理番号：M1771

■ 創作の経緯

詳細な作曲年は不詳。自筆譜旋律スケッチが、《芬陀利華》《雪とけて》のスケッチと楽譜帖の同ページに書かれていることから、これらの3作品は同時期に作曲されたと推測される。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第5巻収録

底資料：『佛教讃歌』 佛教讃歌刊行普及会 1952年

比較資料1：自筆譜（旋律スケッチ）

比較資料2：自筆譜（四声体＋歌詞）

校訂の詳細：特になし

■ 解説

仏教讃歌における芸術歌曲——もし、このようなジャンルを設けるとするならば、どのような作品が該当するでしょうか。私ならまず、《赤き花赤しと見つつ》を挙げたいと思います。詞の持つ清廉で細やかな表情と、言葉がもたらす色彩感、それらを表すための音楽的工夫が高い次元で組み合わせり、楽曲を格調高いものに行っているからです。したがって、歌う人はじっくり取り組む必要がありますが、詩と音楽の両面から深く学ぶことができるので、大変やりがいを感じられると思います。

作詞は、歌人で小説家の岡本かの子（1889～1939）です。岡本の二首の和歌を歌詞として、山田耕筰（1886～1965）が作曲を手がけ、1952（昭和27）年に仏教讃歌刊行普及会より発表されました。

◆ 歌詞について

『仏説阿弥陀経』の中に、「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」の一節があります。お浄土に咲く無数の蓮の花のありさまを表した言葉とされています。

ますが、仏教についてよく研究していた岡本は、お経に描かれたイメージと重ね合わせて、この歌を編んだと思われます。また、「今日を足らえり」という句を、完全な充足の語と捉えるか、あるいは自戒の念を込めて読むのか、その解釈によって歌い方が変わってきますので、よく吟味して判断してください。

◆歌い方のヒント

ピアノ伴奏の和音の重なりや層の厚みをよく聴いて、声を調和させましょう（伴奏譜は、本願寺出版社発行の『聖歌・讃歌集5』に収録されています）。和歌の簡潔で凝縮された世界観を保つように、緊張感を持って歌うことが肝要です。メロディーをフレーズの切れ目ごとに分断せず、途切れない一本の線のように感じて歌うとよいでしょう。

全体を通じて、宙に浮いたような「ソ」の音が印象的な曲です。冒頭の連続するソ音や、フレーズ最後のソ音の処理は、表現の決め手になりますから、音色やニュアンスをいろいろ試しながら練習してください。

石川紀久子（和歌山教区和歌山西組西往寺門徒）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第231号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.